様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ３ 月 １５ 日現在

機関番号：３２６６５
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2013～2013
課題番号：２５８８４０６４

研究課題名（和文）アイルランド女子高等教育の発展に関する諸研究

研究課題名（英文）An Interdisciplinary Look at the Development of Higher Education for Women in Ireland

研究代表者
久保　陽子（Kubo, Yoko）

日本大学・芸術学部・准教授

研究者番号：４０４０６８８０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　700,000円、（間接経費）　210,000円

研究成果の概要（和文）：アイルランドの女子高等教育機会獲得運動は、多学問的視座に立って考察できる興味深い現象である。本研究ではゲーリック・リーグの女子支部を有した女子カレッジと文芸復興を支えたダン・エマー・ギルドの果たした教育的役割に伴う文化史的意義を考察した。また、ジョン・バンヴィルやアイリス・マードックが描いたガヴァネスがアイルランドの歴史と文学の狭間でどのような描かれ方をしているのかを考察した。アイルランドにおける女性の高等教育進学率の高さと実際の就業率の低さとの関連をみていくと、この運動は現代社会学的問題としてもとらえられることが分かり、アイルランド研究のさらなる可能性が窺えた。

研究成果の概要（英文）：The movement to increase opportunities for female higher education in Ireland is a very interesting phenomenon and provides us with an interdisciplinary point of view. In this research, I examined the cultural significance, along with the educational function, of St.Mary's University Dublin which had a women's branch of Gaelic League as well as the Dun Emer Guild which supported Gaelic Revival in 19th century Ireland. I also compared the historical Irish governess of the 19th century with the fictional versions depicted by Irish writers, such as John Banville and Iris Murdoch. Considering the high percentage of female students who go on to higher education along with the low percentage of female employment today, this movement can be perceived as an issue of contemporary social studies, which suggest further avenues for study.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米・英語圏文学

キーワード：アイルランド　女子高等教育　外国文学　西洋史

１．研究開始当初の背景

（１）アイルランド女子高等教育についての研究は、１９世紀に遡った個別のカレッジの歴史とカレッジ設立に関係した人物（ごく少数のプロテスタント中産階級の女性たち）の伝記を中心に国外で行われる研究が主流であった。そしてとりわけここ十数年は、アイルランドの女子高等教育の問題を一連のカトリック問題としても捉えるべきであるという見方が出てきて、上記プロテスタント女性の学校設立とカトリック系の女子修道院付属学校との相互の影響関係など、宗派問題により深く切り込む見解が増えてきている。

国内における関連研究はこれまでほとんどないと言ってよい。アイルランドの女性と教育に関する問題は、イングランドにおける女性をめぐる文化・社会・経済・政治運動の中で包括的に取り扱われ埋没してきたと考えられる。よって、本研究では、アイルランド女子高等教育が実際にはアイルランド内部で独自の発展を遂げた注目すべき側面も多分に抱えていたことを突き止めることに最大の意義があると考えた。

（２）本研究者は、これまでのアイルランド女性作家研究の中で、例えば１９世紀のマライア・エッジワースから２０世紀のアイリス・マードックに至るまで、その時代ごとに個別作家が教育問題に関心を示してきたことに着目してきた。また、イギリス小説で盛んに取り上げられてきた「ガヴァネス（住み込みの家庭教師）」がアイルランド小説でも語られてきたことに注目し、１９世紀のレ・ファニュから２１世紀のジョン・バンヴィルに至る作家の個別作品研究を行ってきた。

その上で、日本アイルランド協会（アイルランドを歴史、文化、経済、社会など広い視野から研究する団体）での２００９年から２０１０年にかけての活動において、「アイルランド女子高等教育の発展―成立過程と研究史の周辺―」に取り組み、文学的アプローチのみならず、歴史的・文化的・現代社会学的視座に立ってこの問題の考察に取り掛かるスタート地点に立った。

本研究では、こうした視座をさらに強化し、高等教育機関の社会的位置づけが、その進学率に応じてエリート型教育からマス型教育、そしてユニバーサル･アクセス型へ展開するというモデルを参照し、実際の就職率との関連などを含めた卒業生たちのその後を追うことによって、現代を生きる女性たちが諸問題に立ち向かう際の有用な足がかりとして発展させていくことにも意義があると考えた。

２．研究の目的

（１）１９世紀に始まったアイルランドの女子高等教育機会獲得運動について、この運動の背景にあるより大きな二つの活動（イングランドのフェミニズム運動、及びアイルランドのカトリック男性による高等教育機会獲得運動）の影響を歴史的に精査し、植民地関係や宗派関係、ジェンダーや階級によって多重決定されたアイルランド女子高等教育運動の独自性を探る。

（２）ゲーリック･リーグとカトリック女子カレッジとの関連、W.B.イェイツの妹たちが立ち上げたアート運動と労働者階級の女性の教育との関連を考察し、この運動が果たした文化的側面を明らかにする。

（３）ガヴァネス養成組織が女子高等教育の発展を促した事実を示しつつ、アイルランド小説によく登場するヒロイン像の一つである「ガヴァネス」の実態に文学的に迫る。

（４）現在のアイルランドでは女性の高等教育進学率が男性のそれを上回っているという事実を考慮しながら、この運動の全体を、女性と教育にまつわる現代社会学的問題として捉え直す。

３．研究の方法

本研究においては、歴史的・文化的・文学

的・社科学的アプローチを取り、複合的な視点に立って考察を進めた。それぞれ、アイルランド史・教育史、アイルランド文化、各作家の自伝や小説、高等教育にまつわる各種データなどの一次資料を精読し、また、各種教育機関設立にかかわった人物の研究書、ガヴァネスにまつわる文化研究書や専門書などの二次資料も扱った。本務校でアクセスできる電子ジャーナルも利用した。

その過程で、所属学会のイアシル・ジャパン（国際アイルランド文学協会日本支部）を始めとする関連学会に参加して情報を収集すると共に（本研究者はイアシル・ジャパンの執行部に属しているため、１１月上旬の大会では企画・運営にも携わった。）、研究成果を口頭発表や論文としてまとめ国内外の学会等に投稿するための準備を行った。

４．研究成果

本研究において得られた新たな知見を、以下に３つにまとめる。

（1）文化的側面。アイルランドの文芸復興を文化的に支えていた「ダン・エマー・ギルド」が、労働者階級の女子教育に携わっていたことが確認できた。

「ダン・エマー・ギルド」とは、１９０４年にエヴェリン・グリーソンとイェイツの姉妹のリリーとエリザベスがダンドラムで結成したギルドで、刺繍品、タペストリー、カーペット、織物などを製作するものだった。彼女たちの目的は、アイルランドの労働者階級の女性たちにアイルランドの素材で美術工芸品を製作させ、家庭芸術産業の運営をすることだった。この運動はアーツ・アンド・クラフツ運動の影響でもあり、また、アイルランドの素材を使った技術の製作を通して文化的知識及び国民的誇りを植えつけるという政治的な側面もあった。同時に、貧しい地域の女性たちに職の機会を与えながら技術を訓練し、地元産業を活性化するという目的もあった。とりわけ本研究者が着目したのは、このギルドの存在意義が、労働者階級の女性に対する教育目的にもあったという点だ。「ダン・エマー・ギルド」は、中産階級の女性が労働者階級の女性を、芸術を通して教化し、女性たちが階級横断的に連動する形で産業としても発展していった注目すべき教育機関だったと言えることが分かった。

（2）文学的側面。アイルランドの女子カレッジから巣立ったガヴァネスを文学的モチーフとして小説で使用している作家の個別研究において、彼らのアイリッシュネスの一端を見いだせた。

ガヴァネスが登場した１９世紀当時では、例えばレ・ファニュが、ゴシック小説の『アンクル・サイラス』（１８６４）で、フランスからアイルランドにやってきたガヴァネスを描いている。２０世紀以降のものとしては、アイリス・マードックが『ユニコーン』（１９６３）で、イギリスからアイルランドに渡ってきたガヴァネスのマリアンを語り手として設定し、アイルランド西部の邸宅に幽閉されている女性を巡る各登場人物の自我の幻想を追究している。ウィリアム・トレヴァーも、『庭の静寂』（１９８３）で、コークのとある一族の話をガヴァネスである遠縁のセアラに語らせ、アングロ・アイリッシュにおける根深いテーマの「血筋」に鋭く切り込んでいる。ジョン・バンヴィルはブッカー賞を受賞した『海に帰る日』（２００５）で、初老の夫マックスが最愛の妻の死という危難を前に、遠い昔、アイルランドの海で謎の死を遂げた少女との束の間の恋愛関係とその家族及び一家に関係を持ったガヴァネスのローズの秘密を追憶しながら、人生の輝きをもう一度取り戻すための自身の再生の道程を模索している。

（3）社会学的側面。現在のアイルランドにおける高等教育進学率の高さと就業率との関係から、教育が目的ではなく手段となり、さらにま

たもう一歩先を行った女性のサステイナブルな人生観を読み取るための手がかりが得られた。

現在のアイルランドにおける就学率は高いが、就業率となるとさほど高くはない。それは全世界的にみられる傾向のようで、国によっては不況からくる雇用不安の表れである場合もあるし、選択的に専業主婦となる高学歴女性が増えていることが話題になっている国もある（参照：米ハーバード大学出身のエミリー・マッチャ―の２０１３年の話題書『ハウス・ワイフ２．０』）。

アイルランドの女性たちに学位が授与されるようになってから１世紀が経ち、女子高等教育史そのものが研究対象となってからは２０年以上だ。ユニヴァーサル・アクセス型の知の共有が可能になってきている現在（参照：アメリカの教育社会学者マーチン・トロウ）、我々研究者がこうした事例に向き合う意義は十分にある。また、経済資本と文化資本（学歴、教養、趣味、環境、その他）といった文化社会学の必要性も強調されるべきで（参照：フランスの社会学者ピエール・ブルデュー）、アイルランドの女性たちが学歴資本を獲得できたのは複雑な環境で幾多の困難を経てきたからこそであり、現代の女性が直面する諸問題を解決するために依って立つ糸口としての今日的意義を持つのだと考察できた。女性の高等教育機会は、洋の東西を問わず、その門戸が開けて以来の永遠不変のテーマである。本研究は、「アイルランド研究」の新たな側面を提示すると共に、現代にも通ずる連続性を持った意義ある試みであったと思われる。

なお、今後は歴史的側面からの研究をさらに進め、国内のキリスト教系女子大学への調査出張、及びアイルランドに現存する女子カレッジへの調査訪問をしたい。また、所属大学の特性を活かし、高等教育を受けた後に芸術に携わった女性たちを追いたいと考えている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　　件）

〔学会発表〕（計　１　件）
①久保陽子、「アイリス・マードック『ユニコーン』をガヴァネス小説として読む」、日本アイルランド協会年次大会、平成 26 年 11 月 23 日、日本大学文理学部（東京都世田谷区）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
久保　陽子（KUBO, Yoko）
日本大学・芸術学部・准教授
研究者番号：４０４０６８８０

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：